



1920年における流行性感冒と コレラの報道について — 『神戸又新日報』 による比較 —

文学部社会学専修3回生 沖本暁子



1. はじめに

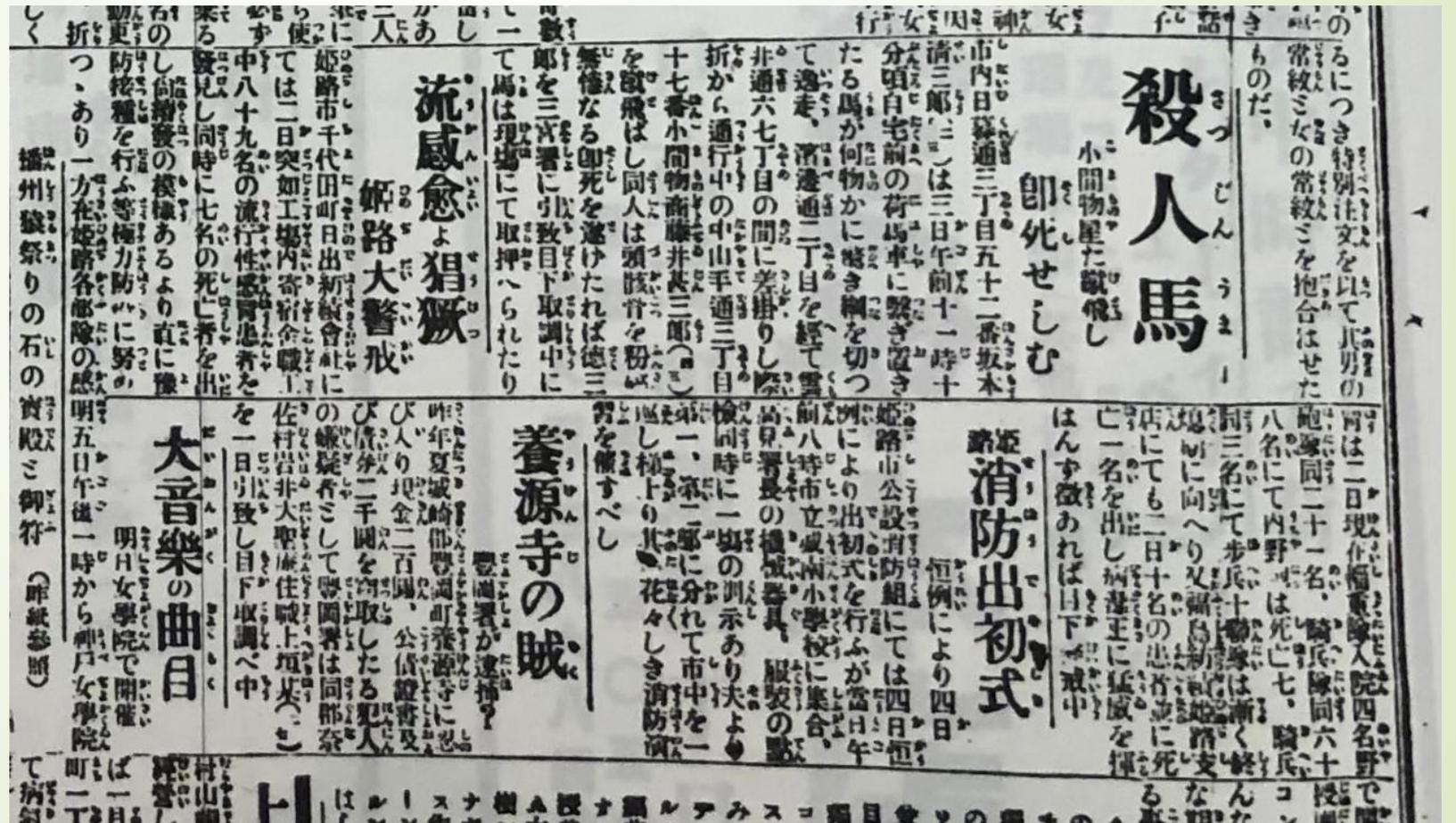
- 本稿のテーマは、報道内容から感染症についてのイメージを明らかにすること。
 - 調査のきっかけはコロナ禍においてテレビやSNSのニュースの影響力の大きさを実感したこと。
- テレビメディア発達以前は新聞が持つ影響力が強かったと予想し、新聞記事に焦点を当てることにした。

2. 調査について

- ▶ 『神戸又新日報』における流行性感冒とコレラについての記事を比較・検討。
- ▶ 調査対象とした時期は1920年。流行性感冒は1~2月に、コレラは6~9月にかけて流行。
- ▶ 流行性感冒は患者数が多く、コレラは致命率が高いという特徴を持つ。どちらの感染症も1920年以前に流行済み。

3.1 最初の報道 (流行性感冒)

『神戸又新日報』 1920.1.4





3.1 最初の報道（流行性感冒）

- ・ 89名の患者が発見され、7名が死亡したという記事。
- ・ 非常に小規模で、周りの記事に埋もれている印象を受ける。
- ・ 流行3年目のため患者情報は日常の一環となり、年明け行事の報道の方に重きが置かれたのかもしれない。



3.1 最初の報道（コレラ）

- ・ 2名の患者が発見されたという記事。大きく報道されている。
- ・ 「大警戒」など強調表現が目立つほか、患者の個人情報など、かなり詳細まで報道しているという特徴がある。
- ・ 注目度の高さがうかがえる一方で、コレラ患者に対する差別的イメージや忌避感に繋がる内容。

3.2 感染症対策（流行性感冒）

①学校（報告書 例2・4）

- ・学校名や欠席率、休校情報など、データに基づく報道。

②予防注射（報告書 例3・5）

- ・記事が多く、分量も多い→注目度が高い話題。

③「細民」（報告書 例1・3）

- ・予防注射等の記事に関連して、流行初期から登場。

3.2 感染症対策（流行性感冒）

③ 「細民」について

- ・ 予防注射等の医学的措置において優遇されている（例3）。
- ・ コレラ患者のような詳細報道や、差別を思わせる報道は見当たらない。
- ・ 医学的対策を実施するにあたって注目すべき対象の1つ。

3.2 感染症対策（コレラ）

①魚類や海水浴を避ける（報告書 例6・7・8）

- ・海水浴と漁猟が禁止されている。記事の大半が海水関係。

②神頼み（報告書 例8）

- ・『コレラ除大明神守護札』が水上署によって配布された。

③食べ物に注意する（報告書 例6・8）

- ・「○○を食って発病」という見出しが多い。

3.2 感染症対策（コレラ）

①～③を通じて

- ・ 個人的かつ世俗的な対策が多い。
- ・ 予防注射など、医療的措置に関する記事はほとんどない。
- ・ 個々人が日常生活において何に注意すれば良いのかを報道。
→最終的には1人1人が注意するしかないという側面が目立つ。

3.3 特徴的な記事（流行性感冒）

○マスクに関する記事

- ・ 1920年1月中旬頃から急増。
- ・ 行政による予防措置に対し、個人ができる対策として正しいマスクの付け方などが報道された。
- ・ マスクの需要増加により、高値になった様子も読み取れる。

3.3 特徴的な記事（コレラ）

○患者逃亡の記事

- ・ 1920年6月末から7月上旬に急増。
- ・ 患者に関する報道と同様、逃亡者や隠蔽協力者に関する詳細情報が報道された。
- ・ 患者が隔離に対する不満を述べた様子がわかる。これらに対する強い忌避感を象徴する記事。

4. おわりに

○流行性感冒

→学校限定で患者数を報道、医学的対策や「細民」報道

- ・患者数が多すぎるので、具体的対策の方が求められた。
- ・「予防注射などで正しく対処すればなんとかなる病気」というイメージ

4. おわりに

○コレラ

→患者に関する詳細報道、世俗的対策、逃亡記事

- ・「一度感染すれば終わり」という死のイメージと結びつく。
- ・感染しないこと自体が重要で、そのためには感染の危険を持つ患者についての情報や、海水・食べ物への注意に需要があった。
- ・コレラへの忌避感と、コレラ患者に対する差別的感情



ご清聴ありがとうございました。

